

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

独学する心は、学問や読書にだけあるのではない。およそ人が生きるために学ぶ行為^{こうい}の中では、^①いつも必要とされているものではないだろうか。

^②、私が去年知り合った大工さんは^{注1}独学の権化^{ごんげ}のような人だ。自分の家を改築したときに、この人に来てもらった。歳^{とし}は当時六五歳だった。名前は高橋茂^{たかはしげる}さん、大工としての^③もとびきりだが、生きる姿もすばらしい。【A】

高橋さんが子どもだった頃は^{こゝろ}集団^④シユウシヨクの^⑤ゼンセイ期。この人は中学卒業後に埼玉へ出て、大工の親方に弟子^{でし}入りをした。そこで一番つらかったのは、「自分が何をすればいいか、だれも言ってくれなかったこと」だったそうだ。作業現場に行っても、指示がこない。親方の仕事を後ろから見ていると「仕事の邪魔^{じゃま}だ」とか「ぼーっとしているな」などと怒鳴^{どな}られる。棒^{ぼう}で殴^{なぐ}られたこともあったそうだ。働きに出て、何をしたらいいかわからないほどつらいことはない。中学を出て親元から離^{はな}れたばかりの子どもだから、^⑥さぞつらかっただろう。【B】

^⑦、現場にしばらく通っていくうちに、自分が何をすればいいのかが段々とわかってきた。そうすると、親方と自分の^⑧サというものが、おのずと見えてくる。親方の^{注2}鉋^{かん}から出る削り^{けず}くずを見て、びっくりする。「どうやったらこんな具合に削れるんだろうか」と考える。夜、皆の仕事が終わり、片づけもすませてから、一人で鉋^{かん}を手にとって不用な木材を削ってみる。見よう見まねだ。そうするうちに仕事がだんだんとおもしろくなってきたという。^{注3}奉公^{ほうこう}に入ってから一年くらいでそうなった。【C】

大工の奉公働きには、給料なんかない。もらえるのは、何百円かのおこづかいだけ。まだ見習いだから、とにかく仕事以外にすることがない。気がついたら、えらく^③を上げていた。働きはじめて五年目に、親方がいきなり「お前はもう一人前だから給料を出す」と言った。一人前の職人に払う給料をいきなりくれたそうだ。^{注4}年功序列^{ねんこうじゆれつ}なんかじゃない。これもまた、^⑨ため息の出るほどすばらしいシステムである。【D】

ここで君たちに考えてもらいたいのは、^⑩なぜ、親方は高橋さんに何も教えなかったのか?ということである。もちろん、意地悪^{いじわる}をしているのでも、技術を隠^{かく}しているのでもない。口で教えることで死んでしまう技が大工の技だからだ。言葉で教えられたもの

は、すぐに忘れてしまう。それはただの知識だから。自分の体を使って発見したものは忘れない。そういうものは知識じゃなく、身についた自分の技になっている。

人間の体は、手も足も一人ひとり違う。大工が木を削るにしても、そのときの感覚、高橋さんの言葉では「勘」は、人によって異なる。木と体と鉋、この三つの間にできる関係は、一〇〇人いたら一〇〇とおりのある。これを口先で教える方法は絶対にならない。これは職人ならだれでも知っていることだろう。だから各々が独自に身につける必要がある。自分なりにあれこれと取り組んでみて、わかる以外にはない。それから大工というものは、自分の扱う木がどう育ってきて、これからどういうふうに変化するか、どう反つて、どう縮むか、木を持っただけでじかに感じられるようになる。でないと、生きたいくつもの木をどう組み合わせたらいいかはわからない。

ところが、電気鉋しか使わない現代の大工さんは、もう⑩そうした感覚を失っている。感覚なしでも、機械が全部やってくれるから。それから無垢の木を扱うことがほとんどなくなった。工業製品の合板は、死んでいて、変化しない。部品として組み立てるだけでいい。これじゃ、木を読むなんて技が育つわけがない。鉋をかける技もなく、木を読むことのできない大工は、高橋さんのような職人からするともう大工とは言えない。建設会社の社員である。

もちろん、これは大工の世界に限らない。近代以降、人間が自然を相手に身につけてきた大切な技はどんどん失われてきた。私たちは、機械の便利さに⑪力れきって、身ひとつの「勘」でしか磨かれぬ技を持ってなくなっている。独学する心は、ここでも失われてしまった。

『知ること、考えること』外山滋比古

注1 独学の権化・・・独学というものが、人間の姿をして現れたもの。

注2 鉋・・・材木の面を削って平らにするための道具。

注3 奉公・・・他人の家に住み込んで、召し使われて働くこと。

注4 年功序列・・・会社などで勤続年数や年齢によって、地位や賃金が決まること。

注5 無垢の木・・・一本の木から取れるつなぎ目のない材木。

注6 合板・・・木材を薄くはぎ取り、数枚張り合わせた板。

問一 — 部①「いつも必要とされているもの」とは具体的に何を指すか。文中からぬき出しなさい。

問二 部②・⑦に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ② たとえば ⑦ でも

イ ② しかし ⑦ そこで

ウ ② ところで ⑦ そのかわり

エ ② そして ⑦ むしろ

問三 部③に、共通して当てはまる体の部位をひらがなで書きなさい。

問四 次の文は、本文中のどこに入るか。最も適当な場所を【A】～【D】から選び、記号で答えなさい。

大した進歩、大した教育じゃないか。

問五 — 部④・⑤・⑧・⑪・⑬のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問六 — 部⑥「さぞつらかっただろう」とあるが、働く上で何がつらかったのか。解答らんに合うように十五字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問七 — 部⑨「ため息の出るほどすばらしいシステム」とあるが、どのような点がすばらしいのか。文中の言葉を使って、四十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問八 — 部⑩ 「なぜ、親方は高橋さんに何も教えなかったのか？」とあるが、親方が高橋さんに何も教えなかった理由を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一人前の大工となるためには、陰ながら努力することが必要なことだから。
- イ 大工の技は、長年経験を積むことで少しずつ身につけていくものだから。
- ウ 中学を出たばかりの子どもであった高橋さんに、自立してほしかったから。
- エ 親方から受けついで技術を、弟子にそう簡単には教えることができないから。
- オ 自分でやってみて気づかなければ、大工としての技は身につかないから。

問九 — 部⑫ 「そうした感覚」とは、どのような感覚のことか。文中の言葉を使って、解答らんに合うように五十字以上六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問十 本文の内容と合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代の大工さんは電気鉋しか使わないので、木を読む技を身につける必要は全くない。
- イ 大工の世界では機械の使用が増え、自分の体を使って技を磨く機会が減ってきている。
- ウ 高橋さんの親方だけが、大工の「勘」は口先だけでは教えられないと気づいていた。
- エ 高橋さんは親方に一人前だと認められたことで、仕事をおもしろく思うようになった。
- オ 人は生きていくために、学問や読書をとおして学び続けなければならない。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈小学校六年生の太輔、淳也、五年生的美保子、淳也の妹で四年生の麻利の四人は、「願いとぼし」を復活させたいと思っている。卒業生へのプレゼントを決める会議で「願いとぼし」を提案するため、あらかじめ作戦会議を開いて相談した。プレゼントを決める会議当日、美保子と麻利は、各学年の代表者として意見を言うことになり、会議に入れない太輔と淳也は、ろうかでの様子を聞いている。〉

「…今聞いた感じだと、どの学年も出し物はかぶらないということで大丈夫ですね。それでは、各学年このまま進めていくということでもよろしく願います。先生、大丈夫ですよね？」

委員長である美保子が、てきばきと話し合いを進めていく。一つの議題が片付いたということでカツカツカというチョークの音も一瞬、途切れた。

「それでは、次の議題に移ります」

きたきたつ、と、淳也の肩をばしぼしと叩く。太輔は①コウフンすると、何かを攻撃したくてたまらなくなる。

「私たち、一年生から五年生までの在校生全員で贈る六年生へのプレゼントについてです。今日までに、各クラスで話し合っただけだと思います」

左耳をドアにくつつけたまま、淳也はささやく。

「麻利のクラスな、話し合いでは、全校合唱に決まったんやて、六年生へのプレゼント。②シキ者が泉ちゃんて、伴奏が朱音ちゃん」

一年生から順番に、クラスで決まった在校生からのプレゼント案を発表している。チョークの音のあいだから、美保子が次の発表を促す声、椅子の脚が教室の床をこする音、各クラスの代表案が漏れ聞こえてくる。

合唱、③エンゲキ、合奏。一年生から三年生まで、順番に発表していく。次はもう四年生の番だ。

ガタガタと、椅子が引かれる音がした。

「私たち四年生は、クラスでの話し合いの結果」

「願いとばしです！」

麻利のキンと高い声が響いた。

「^{ほたる}蛍祭りがなくなってしまうたいま、六年生のために、みんなで願いとばしをしようということになりました！」

「④は？あんな何言ってるの？」話し続ける麻利の言葉にねじ込まれる泉ちゃんの声。

「六年生の人たちはみんな願いとばしがなくなってます！この小学校のグラウンドで毎年行なわれていた願いとばしを、六年生が卒業する前に、もう一度だけフツカツさせたいです！」

何言ってるの、ねえ、そんな話したことないじゃん。矢継ぎ早に飛んでくる泉ちゃんの声をはねのけるためか、麻利の声はどんどん大きくなっていく。

「この学校を卒業しても、私たちのことを忘れないでくださいっていう願いを込めて、みんなで、^{注1}ランタンを飛ばしたいです！私たち四年生の話し合いでは、このように決まりました！」

ガタンと、大きな音がした。麻利がすわったのと同時に、泉ちゃんが立ち上がったらしい。

「あの、ちがいます、こんなこと全然」

「いいな、私も久しぶりにやりたい」

泉ちゃんの声をだれかがさえぎった。⑤太輔と淳也は、思わず顔を見合わせる。

「うちのクラスだって合唱とかしか出てこなくてうんざりしてたんだよね。願いとばしとか、新しくていいじゃん」

書記を⑥ツトめる、美保子のクラスの学級委員だろうか。ここでこんなふうに同意してくれる人がいるとは、作戦会議ではだれも予想していなかった。

「⑦あら、そんな素晴らしい案、全然思いつかなかったわ！」

思わずずっこけそうになった淳也が、「いまの、美保子ちゃん、わざとらしすぎへん？」と目をばちくりさせている。

「ねえ、五年生も願いとばしに一票ってことにしましょうよ。合唱なんてありきたりだし、六年生だって願いとばしのほうがきつと喜ぶと思うわ！」

「へ、へたくそ……」淳也がふるふるえだす。笑うのをこらえているようだ。医務室のときもそうだったけれど、美保子は芝居が大げさだ。

「美保子、なんかキモいんだけど……でも確かにいいよね。五年生もそうしちゃおうつか」
うちらけつこうテキトーに決まっちゃってたし、と、書記はカッカツとチョークを動かす。

「みなさん、どうですか？いまのところ、多数決だと願いとばしに決定ということになります！」
淳也が「やった」と太輔のこを見上げてくる。太輔は強くうなずく。

⑧ いける。このままいってくれ。

「ちよつと待ってください」

自然と組んでいたのひらから、ふつと力がぬけた。

「勝手に何言ってるのよ、麻利。合唱って決まってたじゃん、あたしたちのクラス。それに、もっと冷静に考えたほうがいいと思います。そもそも、そんなにたくさんランタン、どこにあるんですか？」

絶対に見つからないようにかくしていた箱のふたに、そつと手をそえられたような気持ちでした。

「それは、学校が役場？ から買うとか……いろいろ方法は」

美保子の声が突然^{とつぜん}注²ぐくもる。台本の外側の部分に立たされているということが丸わかりだ。

「そもそももうランタンは作られていないって聞きました。うちのお父さん、役場に⑨ツツめてるから、そういうのわかるんです。とばすランタンがどこにもないのに、願いとばしなんてできるわけないです。無理だと思えます」

ランタンを手に入れる具体的な方法。それは作戦会議でも、「きつと学校がどうにかしてくれる。」という結論しか出ていなかった。先生たちオトナは、太輔たちの知らない力をたくさん持つていて、コドモじゃどうにもできないことをどうにかしてくれる

はずだよねと、そんなことを言いあって、^⑩この問題を片付けていた。

「先生はどう思いますか？こんな無理ですよね？」

そうだなあ、と、男の先生の声がする。

「願いとばしが復活するっていうのは確かにわくわくしたけど」先生はここで少しうなつた。「ランタンの生産が止まってるなら、難しいだろうな。それ以外にも、たぶん、消防署の許可が必要になってくると思うし。まあ、何よりランタンがないってことがな……」いい案だとは思うけど、と言ったきり、先生は黙もくってしまう。

方法もない。援護えんごもない。このピンチをどう乗り切ればいいのか、わからない。

「いまの聞いてた？麻利」

泉ちゃんは勝ちほこったように話す。

「ていうかあんた、クラスのみんなの意見ムシして何言ってるのよ。いまのこと、みんなに言うから」

泉ちゃんの声が、ドアも何もはさまずに、直接自分の耳に届いたような気がした。「そんな言い方をするな。もう座りなさい」先生がそうたしなめたけれど、太輔には、泉ちゃんはまだ立ったまま麻利のことを身下ろしているように思えた。

「ど、どうしよ」

こんなん台本にあらへんで、と淳也がオロオロし始める。どうにかしたいけれど、このドアの向こうに行くわけにはいかない。あまりにも何もできなくて、太輔はもどかしさを感じた。

そのときだった。

「そんなん、うちが作る」

麻利の大きな声に続いて、ガツシャン、と何か硬かたいもの同士がぶつかるような音がした。

「^⑪何言ってるの、そんなのムリ」

「^⑫ムリやない」

カシャンカシャン、と音の余韻が響いている。麻利が立ち上がったのと同時に、椅子が後ろにたおれたのだろう。

「^⑩なんですぐムリとか言うん、なあ」

教室の中は、しんとしている。

(『世界地図の下書き』朝井リョウ)

注1 ランタン・・・中にあかりをともして熱気球の原理で空に浮かべるもの。

注2 くぐもる・・・声が口の中にこもって、はつきりしない。

問一 — 部①・②・③・⑥・⑨のカタカナを漢字に直さない。

問二 — 部④「は？あんた何言ってるの？」とあるが、ここでの「泉ちゃん」の気持ちとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クラスでの話し合いですんざん話し合ったのに、会議でもう一度話し合うことになり腹立たしく思う気持ち。

イ クラスでの話し合いでは、「願いとぼし」は話題にもなっていないかったのに、急に言い出されて驚きあきれる気持ち。

ウ クラスでの話し合いでは、「願いとぼし」は無理だということになったのに、また言い出されてうんざりする気持ち。

エ クラスでの話し合いでは、「合唱」に決まったのに、なぜ別のものとまちがえるのか不思議な気持ち。

問三 — 部⑤「太輔と淳也は、思わず顔を見合わせる」とあるが、二人がこのようにした理由を説明した次の文の□に当てはまる言葉を、文中から二十字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

□ということは予想しておらず、おどろいたから。

問四 — 部⑦・⑩・⑫は、だれの発言か。次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 美保子 イ 麻利 ウ 泉 エ 先生 オ 太輔

問五 — 部⑧ 「いける。このままいってくれ」とあるが、太輔はどのようなようになってほしいと思っているのか。文中の言葉を使って十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問六 — 部⑩ 「この問題」とはどのような問題か。解答らんには合うように二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 — 部⑬ 「なんですぐムリとか言うん」とあるが、このときの麻利の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 解決法をはっきりと思いついたわけではないが、できないと決めつけられてしまうのは絶対にいやだという気持ち。

イ 解決法をはっきりと思いついたわけではないが、クラスみんなに言いつけられるのはなんとかさげたいという気持ち。

ウ 自分がランタンの作り方を知っているのに、みんながあきらめていることが腹立たしい気持ち。

エ 自分がランタンの作り方を知っているのに、なんとか自分の意見を受け入れてほしいとあせる気持ち。

オ なんにも手を貸してくれないオトナに腹を立て、自分たちだけでもなんとかしてやりとげたいという気持ち。

問八 本文の内容と**合わないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ランタンを飛ばす「願いとぼし」は、数年前までこの小学校のグラウンドで毎年行われていた。

イ 四年生の麻利のクラスでの話し合いでは、本当は「願いとぼし」ではなく、「合唱」と決まっていた。

ウ 五年生の美保子は「願いとぼし」に賛成だったが、代表者の会議では賛成だと言えなかった。

エ 先生は、ランタンを飛ばす「願いとぼし」をするには、おそらく消防署の許可がいると思っている。

オ 先生は、もうランタンが生産されていないと聞いて、「願いとぼし」をするのは難しいと思っている。